
桜の幻想

深皇玖 楸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の幻想

【Nコード】

N0159D

【作者名】

深皇玖 楸

【あらすじ】

紫藤グループの会長令嬢・紫藤緋月は実は養女で、生き別れになった双子の兄がいた。心の奥で兄を想う中、緋月の前に婚約者が現れる。だが、その顔は兄と緋月にそっくりで。ただ今大幅改稿中です。もうしばらくお待ちください。フェードアウトはしてありません。頑張ります…。

プロローグ（前書き）

すぐくどくどバタしたことになる気がしますが、どうぞ生温かい目で見守ってやって下さい。即興ですので軽い気持ちで流してくれれば幸いです。

プロローグ

桜を見る度、想い出そう。

貴方の笑顔を。

桜が咲く度、信じよう。

貴方にもう一度、逢えろと。

桜が散る度、願おう。

貴方のあの瞳を、もう一度見せて欲しい、と。

つくづく、厭な約束をした。今夜もまた同じ夢を見て、そして起きる。

子供のころから、ずっとそれは変わらない。

私の名前は、紫藤緋月という。

紫藤グループの令嬢として、世間に名は通っている。

毎日見合いの話は舞い込んでくるし、月に一度は何かにつけて主催のパーティがある。逆玉の輿狙いの男に囲まれて嬉しい訳がない。多分、そんな日常が、毎晩あの夢を見させているのかも知れない。きっと、私が心から笑えた、最後の時間だったから。

日常に疲れて、諦めを覚えたから、そんな約束をした自分が憎らしいのだと、本当はとくに気付いていた。

だから、忘れてしまいたい。あれはただの憧れで、すべて独りよがりな幻想だと思えば、きっと私は笑えるのだと自分に言い聞かせて、『その日』から十年間頑張り続けてきた。

でも。

もう疲れてしまった。

寝ても覚めても毎日同じように同じものを見て、同じ思いを抱いて生きていくことに。

変わっていったのは、自分の成長と、季節だけ。それだけが、私が感じた時の流れ。

もう、想像すらできない。

16歳になった、兄の現在の姿など。

十年も会っていない。顔も変わっただろうし、相手は男だ。
声も変われば環境も変わる。

施設にはもう居ないようだから、きっと全く違う世界に居るのだ
ろう。

どちらが離れてしまったのかと訊かれれば、当然私の方だ。
だが今の自分の状況はあまり恵まれてはいない。

私は未だに贅沢には馴れないのだ。

苦痛という名の檻・前編

どんなに来て欲しくなくても、その時は来る。

それが夢と現実の狭間の僅かな時間だろうと、別れの時だろうと、何だろうと。

六時になればメイドの紗季子が朝食を運んで来るし、七時には当然の如く黒いベンツに乗り込まなくてはいけない。

そんなお伽噺な生活も、私は十年経つても慣れることはできない。それもまた、苦痛だということだ。

そして六時。紗季子はいつも通りに来て、いつも通りのことを始める。

私は無表情でそれに応えようと、今日もまた、同じようにして、やっぱり七時にベンツに乗り込んだ。

私立聖苺学園。そこが私の通う高校。幼稚舎から大学院まで揃って、はつきり言ってレベルはかなり高い方だと思う。

金持ちもたくさんいるけれど、独自の奨学金制度と学生寮のお陰で、身寄りのない子供も、かなり居るのも事実だ。

そのせいで、校舎は二つある。

金持ちが紅苺棟、奨学生は青苺棟という校舎があり、更にその間には紫苺棟という校舎・・・というよりは、塀のような幅の狭い、うなぎの寝床のような窓のない牢獄みたいな建物がある。そこは、いわば掃きだめ。

自分からはいる者も居なくはないが、多くは、どちらの校舎からも追い出された者が入る場所だ。

全く、何度紫苓棟に入りたと思ったことが。それでも入らないのは、自分の立場や面子が大事だからではない。

私を引き取った義父に、心配を掛けないようにするためだ。

紫藤グループという世界でもトップレベルの大会社の社長のくせして、まだ三十路。結婚だって可能だろうし、わざわざ女の養子を迎える理由もない。

いろいろ謎はあるけれど、とりあえず憎めない人なので、迷惑かけたくはないのだ。

私は紫苓棟の方へと、歩を進める。見学するのも悪くはないだろう。

「紫藤さん、おはようございます」

…始まった…。

放つといってくれば、それでいいのに、誰もかもが寄ってくる。

これが純粋な好意からの行動なら、少しは気分がいいのかもしれないけれど。

実際は、会社を有利にするために近づいてきたり、政略結婚狙いだったりするのだし。

引き取られてからというものの、結局誰も、私の内心に興味などもつてくれたとは思えない。私が養子だとばらしてしまえば、一様に近寄らなくなるだろうに。

そう思うと、少しだけ口許が緩む。

「あの…紫藤さん…？」

「何かしら。ああ、そういえば…。おはよう」

私がそう言うと、黙ってしまう。つまり、というか当たり前に、ごきげんとりだ。

「僕…紫藤さんの笑ったところ、初めて見ました」

「別に笑ったわけじゃないわよ」

そっけなく言い捨てて、私は歩くスピードを上げる。今日の見学は次の機会にお流れだ。

そしてそのまま振り払うようにして、教室に入っていく。

まあもちろん、そこでもそう状況が変わるわけじゃないけれど。クラスメイトは大抵私が不機嫌だと、遠巻きにして見ているだけだから、少しは楽だ。

だが。

教室に入っても、今日は何だか違う。

皆、私を見ているのだ。

それも、あろうことか、好奇心に目を輝かせて。

「私の顔に何かついてます？」 頬を撫でてみても違和感はないし、目をこすつても目脂はない。

終いには寝癖も確かめたり、制服に変なところがないかあちこちたしかめてみたが、いつもと何も変わらない自分があるばかりだ。

「紫藤さん、おめでとうございます」

「え？」

何がおめでたいのだろうか。

「え…し、紫藤さん、今日誕生日ですよ？」

「あ…そういえば」

今日は12月2日。私の誕生日、ということになっている日だ。

というのも、引き取られた時に名前だけでなく、誕生日や血液型その他諸々、全て改竄されてしまったのだ。

公に出回っている私の情報は、12月2日生まれの射手座の羊年、O型の母親似というものだ。

実際は、12月15日生まれの射手座の羊年、A型で、誰に似ているのかは不明。

誕生日だって、ほんの少し早くなっただけで大差はないし、興味もないので特に気にしていなかったが、周りは違ったらしい。私はクラスメイト達の異様に輝いた目と、教室の後ろに置かれたプレゼントのみならず、他のクラスの生徒に上級生、果ては青苓棟の生

徒や紫苓棟の生徒、中等部やら初等部やら大学部、先生の視線、続々と門を抜けてくるトラック、屋上のヘリポートに止まるヘリコプターetc.に、目眩を覚える。

何故、こんな小娘一人の誕生日（嘘）ごときにここまで熱くなれるのだろうか。一拍後、私は覚悟を決めてクラスメイトその他と向き合った。

そのあと、私がプレゼント攻勢の憂き目に遭ったのは、言うまでもない。

苦痛という名の檻・後編

さ、さんざんな目にあつた・・・。

朝から『お誕生日おめでとうございます、これ、つまらないものですが、どうぞ』ばかり聞かされていれば、それだけで体力も消耗しようというものだ。

紅苓棟は靴の履き替えがないので、体育の時間まで気付かなかったが、下駄箱にも大量のプレゼントが・・・。

無下に断つて会社に響いては困るので、仕方なく全て受け取ってしまった結果・・・。

手に負えない量になってしまい、大型トラックを呼ぶはめになり・・・。

み、見たくもない・・・。

思わず現実逃避をしたくなるぐらいのプレゼントという名の賄賂に近いものは、無駄に広い自室の大半を覆い尽くしていた。

私がプレゼントの山を見て頭を抱えていると。

「まあ、すごい量ですわね」　「紗季子・・・欲しいならあげるわよ」

ここぞとばかりに、一斉処分してしまおうと思っていると。

「お嬢様、売ってはどうぞでしょう」

紗季子が笑いながら提案してくる。

だが。

「駄目よ。人から貰ったものは、売らないのが最低限のマナーよ?。」

三つ子の魂百までというが、まさにそれで、たかだか十年で幼い頃に叩き込まれたマナーは消えることはない。

「それで御座いますね。失礼しました。　　ところでお嬢様、

そろそろパーティの支度　　」

そうだった。恒例の誕生パーティ。主役はもちろん私。

「分かってるから」

いそいそと準備を整えようとしている紗季子をどうにかして追い出し、ずるずると座り込む。

もう5時を回っているし、パーティは7時からだ。

もちろん、パーティはすつぽかす気満々だ。

紗季子は毎年のことで諦めかけているし、義父は笑ってばかりで面白がっているだけだ。

招待客も顔ぶれが変わらないので諦めているらしい。

このパーティと、自分主役のパーティに私が出席しないのは、有名な話だ。

「さて、逃げるか」

毎年、この時だけは少しだけ心も弾む。私は制服を脱ぐと、黒のタートルネックにジャケット、ショートパンツにニーハイソックスという、お嬢様らしくない格好に着替え、さらにコートを羽織り、隠してあったブーツを履き、財布とケータイ、そして筆記用具にホットのブラックコーヒー（エスプレッソ）の入った水筒とサンドイッチ、挙げ句の果てには着替え（下着込み）にタオルまでバックに詰め込んで、三階の窓からダイブする。

え？無事かって？

もちろん。

こう見えても、運動神経は他人に劣ったと感じたことがない。

まあ、頭もいいのか悪いのかよく分からないけれど、一応学年トップ。全国模試は・・・上から三番以内を争ったり一位もぎ取ったりしているから・・・やっぱりいい方なのだろう。

兎に角、バックとコートで抵抗減らして、足からすんって感じに。

十年やってれば、そこそこ上達するものだ。

と、いうわけで。

私は屋敷の外へと逃走した。

もちろん、明日の朝には戻るつもりではあるけれど、今は少しだけ、気分がいい。

そして月夜は嘲笑う

街に出た私は、ネオンの眩しさに目を細めながら歩く。　　さ
て、どうしよう。

映画館でオールするか、カプセルホテル入るか、野宿するか・
。

「ん？キミ、超カワイイね。どお、暇なら遊ばない？」

・・・アホがいる。今時そんなベタなナンパ、聞いてるこつち
が恥ずかしい。

「おいシンジ、何やってんだよ・・・って、かつかわい！っ！
！」

重症患者がいる。言っておくけれど、私の顔が可愛いとか、自
分で思ったことは一度もないし、別に普通だと思っただけけれど。

「キミ、名前なんてーの？あつ、オレはシンジ。こいつはコウ
スケ。で、こいつがマサトにヨウにザイ。んで、あいつがアクト」
顔の造形はカッコいいのかどうかのまいち理解できないけ
れど、背は一樣に高くて、壁に囲まれている気分になる。

「何、キミ家出？だったらオレらが匿ってあげるよ？」

これには流石の私もキレた。

だいたい、人のバック勝手に開けるし。

「あら意外。匿うだなんて高尚な言葉を知ってるだなんて、お
サルさんじゃなかったんですね」

「なっ・・・」

「でも残念。私、今日は家に居たくないだけで、親も承知なん
です。お世辞を言うくらい頭のあんなら、もっとそっこの好き
そうな子選んでくださいね」

なんというか、経営者に短気は禁物という具合に仕込まれた結
果が、『敬語で嫌味』。

お陰で男たちはすっかり毒気を抜かれた顔をしている。

そかそこ満足して踵を返すと。

「じ、じゃあオレらが好きにしてやるよ」

予想外。まさかここまで傍迷惑なナンパがあったなんて。

世の中そんなに女に不自由しているのだろうか。

あとは精神がイカれているかおちよくっているか、目がネオンにやられているか、どれかだろう。

百歩譲ろうが何だろうが、私がかわいいとかはあり得ないし。

「言いましたよね？親も承知だと。はっきり言って迷惑なんですけど」

「またまたあ、強がっちゃって」

ぶっ飛ばしていいんだろうか。思わず拳に力を込めてしまう。

「キミ、素人じゃないんだ……」

アキトと呼ばれていた少年が、私の固められた拳を見て呟いた。

「……………そういう貴方もそれがわかるあたり、素人じゃないんですね」

何の素人かって？

もちろん喧嘩ではない。空手だ。

とはいえ、私が素人なのはR指定系のものばかりで、ほとんどのものはマスターさせられた。

そのお陰で、多分身体能力でも男子に劣るということはないと思う。

アキトと向き合い、互いに仕草や体つきなどを見合うこと数分。他の男たちは黙っているし、ギャラリーは増加している。

だが、私はそんなことも気にならないほどの奇妙な感覚に襲われていた。

そしてそれは、アキトも同じだったらしい。彼の表情は驚きに満ちていた。

こんな所にいるのが場違いなほど、綺麗な顔。日焼けしていないところが、いかにも良家の子弟らしい。筋張った手も、鍛えては

あっても、荒れたところが少しもない。身長は168センチの私よりもかなり高いが、『熊』という印象を受けないのは、しなやかさがあるせいだろう。もちろん、そこまでだったら驚くことはないけれど。

アキトの切れ長の目は、明らかに私と似ていた。

その、瞳の色が。

当たり前だが日本人なので、瞳だって黒く茶が一般的。私の目だって、少し珍しいかも知れないが、金に近い茶色だ。

昔から不思議に思っていたのは、目を伏せたりすがめたりすると、銀に見えるということだ。

今、私を見下ろすために伏せられている、アキトの目のように。

それだけではない。緩く吹く風に微かに揺れている髪もそう。黒いのに、光に透けると青く光る。

兄ではない。

妙な話だが、断じて兄ではないのだと確信していた。

だから、ともすれば零れでそうになる兄の名を、呑み込むことができた。

「……………初めて、逢った……………。こんなに自分に似た人……………」

……………髪と目が同じだからって、似ているといった方がいいのだろうか。

しかし、兄以外にこの髪とこの瞳を宿す人物に逢ったことなど、いままでなかったことだ。

正直、安心した。

多分少数派だけで、全国的に見れば他にももつというはず。そんな淡い期待を抱いたとき。

「へ……………。ほんとだ。女版アキトじゃん。もしかして隠し子発覚とか？家庭崩壊の危機とかに発展したりして……………」

隠し子。

頭に冷水…なんてものじゃない。脳天力チ割られた気分だ。でも。

たしかに納得はできる。というより、辻褄は合う。

本能的に拒否していたのかもしれない。

自分がこの世で認められた存在ではないのかもしれないということ。

「……隠し子、ね」

アキトの目が、見開いているのに銀に光る。

感情が昂るとそうなるところも、私と同じ。

ただ、兄は緑に光った。アキトは、紅く光った。私は、兄によると、蒼く光るらしい。

「俺の名前はアキトだ。お前は？」

「輝悠よ。輝きが悠かに続くという意味……」

空に輝く上弦の月が、嘲笑うかのように輝く夜。

高いビルとネオンに阻まれていたために、そのことに気付いたのは、カプセルホテルに入ってからだった。

私の幸せはどこですか？

十年経っても変人は変人だと思う。 当然、義父のことだ。
普通、双子の兄妹の孤児で、養子にするなら、断然男のほうを取るだろう。

なのに、義父 紫藤柊（しゅう・30歳・独身）は、自分が二十歳になった誕生日に施設に来て様子を見ると、私に養子になるように言ってきたのだ。

これを変人と呼ばずに何と呼ぶ。

院長先生以下はもちろん、他の子供たちも両手を挙げて賛成し、兄まで仕方ないとか言い出す始末。

多分皆心の中では私と同じことを思っていたと思う。

幾らでも貰い手のあるような家柄と容姿と性格の癖して、子供を作る気も結婚する気もないのかよ。

って。

まあ今では性格の部分は否定するけど、ただかた十年でそんなに変わらない。

おまけにタラシ。

貴方は本当に紫藤グループの会長なんですかってぐらい、節操がない。 今も五股六股当たり前の、男女問わず。

十年前なんか九股してたらしいし、義父の通っていた高校では、伝説のプレイボーイとして男女問わずの伝説がある。 もちろん聖苓学園の伝説。その学園の中で相手にしてもらえなかったものは一人もいないという、ハーレムというか、突っ込めれば何でもいいというか……。サルと言うか……。

我が義父ながら情けないほどの色ボケっぷりには、昔から呆れっぱなしだ。

二十歳の頃は当然、伝説は続いていたのだから。
それでもって、その両親。

もちろん今でも健在だが、こつちも相当酷い。

今は何故かイヌイトの村でアザラシ漁をしながら気儘に生きて
いるけれど、平気で人前でキスするは青姦推奨派だわ…………。

こんなふざけた人間が、大企業のトップ張ってることが不思議な
くらいの色ボケぶりなのだ。

と、言ってみたとこで、どうしようもない。

あの色ボケは遺伝だろうから。

大体私を引き取ったのだって、一生色ボケでいたいからなのだろ
うし。

「お嬢様」

コンコンと、紗季子が呼び掛けてくる。

私は読んでいた本から顔を上げ、部屋の入り口まで歩いていく。

「どうしたの、紗季子」

「ええ…実は来客がありまして……。緋月様をお呼びするように
と、旦那様が…」

「お義父様が…？まあ、どうせ見合いの話なんでしょうけど」

噂をすれば影というやつで、義父は私が心のなかで悪態をつく度
に、なにかしら用がある。

大抵見合い話だけだ。

断る気満々で客間へ行くと。

嗚呼、やっぱり、現在の名前で言わなかったのは、失敗だった。

輝悠だって、偽名ではないけれど。

私の本名は綺夕きせき。兄以外には、知っているだろう人間は、
本当の両親くらいのはず。

けれどあの眩しい街で逢った少年は、私を突き止めた。

「緋月。こちらは弓削ゆげグループの嫡男の暁人君だ。お前と同じ年
らしいよ」

「初めまして、弓削さん。紫藤緋月です」

こうなつたらもう、めい一杯開き直つてやる。他人の振り。

「初めまして」

「今日はどうされましたの？弓削グループの御曹司さまといえ、寝る間もないくらい忙しいという噂ですのに……」

これは嫌味だ。忙しいのは色ボケだからだろう……？と。

「いえ、そんなには忙しくありませんが……。緋月さんに話がありまして」

……。

嫌味に気付いていないらしい。多分、馬鹿。

「そういうことなら私は席を外すよ。 ごゆっくり」

何なんだろう。最後のごゆっくりは。

というか、行かないで欲しい。この猫かぶり男と二人きりになりたくない。

勿論、義父は出ていってしまった。

……。 空気が重い。

ギスギスした感じで、まとわりついてくる。

「 お前、偽名まで騙れるんだな」

「失礼ね。あれは偽名じゃないわ。 私の名前よ」

「二重人格とかか？」

「じゃなくて、本名」

……でもないけど。

私の名前だつて、『緋月』は通り名でしかなくて、戸籍上は『綺夕』のまま。

紫藤家の情報管理は殊、私ことに関しては特に徹底しているから、養子の件やその他諸々がバレることはないけれど。 どんなに弓削グループが漁ろうと、バレない自信はある。 あるけれど。

気にはなる。兄のその後も、共通する髪と目も。

「本名…ね。そういうのは、あの場で言うべきじゃないだろ」

「……素直に『紫藤緋月』って名乗るより、余程まだわ。『輝悠』だなんて名前、なかなかないだろうし、あの場で本名名乗ったのは貴方も同じでしょう？」 う。自分でも驚いた。

多分生まれて初めてこんなに長い台詞を言った。

それにしても。

パーティだろうが喫茶店だろうが教室だろうが授業中だろうが、飽きもせずに喋り続けられる、あの女性たちは、一体どんな構造をしているのだろう。

こんなに長い台詞を言うのは非常に疲れるのだ。

同性ながら、実に謎である。

この際告白しよう。

私が今まで人付き合いを忌避してきたのは、別に人見知りでもなんでもない。

あの異常なまでの口数の多さに、身体が拒否反応を起こして、ストレス性のアレルギーを引き起こしてしまったのだ。

だから自分が主役だったり主賓だったりするパーティは、逃げ出すことを許してもらっているのだ。

そんな自分が、こんなに雄弁になる日があるなんて。

自分自身の急激な変化に一番戸惑ってるのは、もちろん私、というわけだ。

けれども、どうやら驚いたのは向こうも同じらしく、暁人は目を銀に見開いて啞然としている。

「思ってたより、よく喋るな…」

「……自分でも、初めてよ。あんなに長い台詞を言ったのは」「パーティで会うつと、いつも隅にいただろ」

なんでこの男はそんなところまで観察しているのか、甚だ疑問だ。「嫌いだけど、出ないわけにいかないもの。そこに顔があれば誰も気にしないけど、欠席するとかえって目立つのよ」 ああ。まただ。何故だろう。

今日は喋り過ぎてる気がする。

「計算づくかよ」

目立つのが嫌いなのは、私が本当の紫藤家の人間ではないから。義父の顔と私の顔は、親子とはとても呼べない。

おまけに三十路のくせに、十は若く見える顔だから、初対面の人間にカップルに間違えられる、ということも、ここ数年続いている。

おまけに義父は言わずと知れた超プレイボーイ。私から見れば歩く史上最大の公害なのに、世界でも有数の巨大多国籍企業グループの会長。

世の中って、本当に分からない。

「で？何の用なのかしら、暁人さん」

適当に話を切り上げてさっさと本題に移ると、暁人は急に視線を泳がせ始める。

「あゝ……っえ、う……んっ………その、まあ……っ……。つまり、だな……っ」

歯切れが悪すぎる上に、たったこれだけの言葉を発するのに咳払いが四回も入っている。ある意味感心だ。

私には、そんな芸当は到底無理だろう。疲れて仕方がない。

「ああと……っ……。………だあっもうつ……！！空気読め！察しろ……！！」

「……A K Yに準じて」

敢えて空気を読まない。

何が言いたいのか察しろと言われても、分からないから聞いているのだし、暁人の命令に従うつもりもない。

「……っ、だから、婚約取り付けに来たんだよっ」

頭のなかで鐘が鳴る。鳩は飛び立たないし、歌も欲しくない。むしろ聞こえなくて多いに結構だけれど。

「お断りよ」

「いや、それが、どいやら親同士でもう決まりかけてるらしくてさ。拒否権はないんだと」

私にも、ということとは。

ああ、駄目だ。聞こえる。

鐘の音も鳩の羽ばたく音も。BGMはその歌でなくて、“Eve rybody wants to be happy”で始まる、ずっと雨の音が入っている、曲。“愛している人に愛されたい”？当たり前だ。

“皆願う”？それが人間というものだ。

“曇り空を見上げて”？あいにく快晴だ。

“Tell me the way a misty rain”
？まったくだ。私の人生真っ暗。霧雨にでも打たれたい。足元泥沼だろうけど。

別に、“Tacth me”も“Love me”も“kiss me”してくれなくて構わないけど、今日ほどこの曲に共感した日は他にない。

“不器用な人間たちたちのゲーム”ではないけれど。

“もうやめなよ”とも言ったことないし、“君に言って自分が言われた気がした”わけでもない。

けど、訊きたいことはある。

もし、神様がいらっしやるのなら、一つだけ訊いてもよ

ろしいでしょうか。

私の幸せは、どこですか？

私の平穏な日々はどこですか？

「断固お断りよ」

暁人がどんなに勇気のある告白してきたって、同じ答えを返すだろう。

だが、意に反して、出てきたのは、最悪で最低で最凶の言葉。

「祖父同士で決めたらしいからな。大分前から決まっていたらしいし、明後日から聖苓に転校しなきゃなんないんだよ」

「嫌そうな顔するくらいなら断ればいいでしょう？とにかく私は貴方なんかお断りよ」

「ああ断固として断るつもりだっ
たさ。けど、昨日の夜街でお前を見つけて、気が変わった」

「それは私を最初から知っていて、あんな台詞を吐いたのかしら？」

『素人じゃないんですね』？

そんなこと、所謂ハイソサエティーの人間の間では有名な話で、しかも許嫁だというのなら尚更だろう。

紫藤家の教育方針は、義務教育が終了するまでに大抵の資格を取らさせること。

そついうところには一切余念がなく、十歳の頃にはSATとかま
で受けさせられて、アメリカに留学させられていたこともある。

お陰でアメリカの高校の卒業証書も博士号の資格も持っている。

日本の学校に通うのも味があつていいとか、同年代の友人がいる
と伝が広がるとか、興味のないことばかり並べ立てて無理矢理聖苓
学園に入れただけで、学校に通っているのに深い意味はない。

もちろん私がアメリカの卒業証書を持っていたり、博士号を持っ
ていたりするのは知られていないが、紫藤家の教育がなされている
ことが如実な数々の行動と言動で、噂にはなっていたのだ。

暁人は押し黙り、視線を気まずそうに下げる。

どうやら、開き直るだけの根性はないらしい。

「とにかく、この話はお断りよ。聖苓に通うことは仕方ないだろうけど、私が中退するか留学するかすればそれで済むし。探している人もいるし。旅にでるのも悪くないわね」

やはり、何かおかしい。

饒舌になっているのは、何故なのだろう。

そんな私の心も知らずに、暁人は会話を続ける。

「探している人……？」

「……そうよ。私の、双子の兄よ」

……。言ったらすぐく以外そうな顔をされた。

「初耳だな」

それはそうだろう。なにせあつちは紫藤姓でもなければ今どこで何をして生きているのかすら判らない状態なのだから。

私が唯一つだけ、すがっているものだから。

兄にしてみれば、私は過去の人間なのだろうし、必要のない存在なのかもしれない。

そこまで考えてすら、私は桜の夢を見る。そこには、どこまでも女々しく、駄々っ子のような自分がいる。

「変な話だな。お前は一人っ子のはずだろう？例えどちらか一方を残さなければならぬ場合でも、普通は男の方を残すだろう？それがなぜ」

「私に答える義理はないわ」

言えるわけもない。

兄の名でさえも。

「ならもう一つ訊く。お前の名は輝悠で間違いないのか？」

「間違いないわよ」

何があっても。

この男がバラさない可能性が低くならない限り、嘘を吐き続けるつもりだ。

「まだ嘘を吐くのか？綺夕」

「　　」

声にならない。

けれども、兄ではない。

可能性としては、腹違いの兄弟。もしくは、三つ子だったのか。

偶然では、知ることができない筈だから。

あまりにも、似すぎているから。

いずれにせよ、いろいろな感情が混ざりあっているにも関わらず、その感情の全てが、私の身体を震わすものだった。
なのに。

「　　出ていきなさい、暁人。それでもって髪の毛寄越しなさい。DNA鑑定で兄弟関係が成立したら、婚約破棄も確定だもの。…とことん演技が上手いのね。初耳だなんて嘘なくせに」

どうして私の口から出る声はこんなにも冷たい音なのだろう。

「ごめん…」

捨てられた仔犬の目で訴えないでほしい。似合わない。この上もなく滑稽。こっちが苛めているみたいに思われる。

と、キレル寸前の私のイライラは募るばかりだ。

自分にも、暁人にも。

「謝るくらいなら早く出ていきなさい。髪の毛置いて。言っておくけど、私は例えば血の繋がりがあっても貴方を兄とも弟とも見ないから。一生他人でいましょうね」

キレても、饒舌なところだけは変わらなかった……。

しかし、自分もまだ人間だったことに安堵さえしている。

一方の暁人は、無表情で自分の髪の毛を一本抜くと、私に握らせて、慇懃に礼をして退室した。

『そうまでしてでも、近づきたかったことは事実だから』

と、扉を閉める瞬間に聞こえた呟きは、気のせいなのだろうか。

その頃になつてようやく、暁人に対してだけ、嘘を吐いていたことを責め、自分の弁解をしていなかったことに気付いた。

あれが、兄弟という存在なのだろうか。

だとしたら、兄とはあまりにも違う。

だから、と思う。

恐らく暁人は弟なのだろうと。

窓越しに見える冬空の下、枯れた木ばかりの並木道を見て、私は十年振りに声に出す。

「きょうい僑苡……」 兄の本名を。

拝啓 兄上様

貴方と別れてからというもの、私の平穩は、崩れ去ってしまったようです。

呪っていたりはしませんよね？

私の平穩な日々はどこですか？（後書き）

遅くなりました。

なるべく早く書くように努力します。

転校生は二人！！

日曜日を挟んで月曜日。

苛々が最高に積もった私は、誰よりも早く学校に行った。

私のクラスは一年紅A組。

これが青苓棟のほうだと一年青A組とかになる。

紫苓棟の場合はクラスもなくて、ただ個人のスクールネームで呼ばれる。

スクールネームというのは、入学もしくは編入したときの最初のロングホームルームで決める、学園内での名前だ。

もっとも、普段の生活では使われることはない。

使われるのは、学園祭や体育祭、その他学年レクリエーションのときが多い。

ただ、何でも良いというわけではなく、いくつか決まりがある。

一つ目は、“色が入っていること”。

はつきり言って、聖苓はマンモス校だ。

それが、幼稚舎から大学院までの在学生生徒全員に色の名前を付けるという大変さは並大抵のものではない。

重ならないように在学期間の長い生徒及び優秀な生徒順に名簿が作られ、挑戦資格まで明記されるという徹底ぶりだ。

二つ目は、“人の名前でないこと”。

つまり、赤とか青とかはいいいけど、たとえば茜は色だから良くても、赤音とかは駄目だということだ。

この辺りの細かい規定は非常に複雑で、最終判断は各部の代表（生徒会長だったりいろいろ）が会議を開いてどうするかを決める。

べつにそこまで熱くなる必要もないと思うけど。

三つ目は、“物の名前でないこと”。

レタスとかキャベツは駄目だということだ。

只、毎年500人位はスクールネームが決まらなくてあぶれる人が出る。

これは個人が決めるわけじゃなくて、クラスメイトの意見で決めるものなので仕方がない。

つまりはそのスクールネームが似合わないとか、クラスメイトが思ったら、その年は強制的に名前を変えなくてはならないということでもある。

だから毎年変更する人もいれば、在学中に一度も変わらない人もいる。

そして、毎年変更したりする人の中には、決まらなかった人も含まれているのだ。

というのも、決まらなかったら、昨年度で卒業したり中退したりした生徒のスクールネームを使えるのだ。

ただし、これは一年レンタルで、次の年は変えなくてはならない。その連鎖を脱出する方法としては、外部への受験を希望する先輩もしくは後輩またはタメと仲良くなり、在学中にスクールネームの譲渡書を提出させるというものがある。

そうすると、優先順位関係なしに、挑戦権は発動しなくなるのだ。私の場合は初等部からだったから、案外すんなり決まった。

なにしろ幼稚舎からの持ち上がりは27人で、大学部だろうが高等部だろうが中等部だろうが、新入生の待遇は平等だからだ。

ちなみに私のスクールネームは極光。オーロラのことである。

多分この色は人気が高かったのだと思う。

なにしろ綺麗だから。

虹なんて人も、いるにはいたが。

一体どういう経緯でこの色になったかのかは、覚えていない。

気付いたら決まっていたのだから仕方がない。

もし暁人が懲りずに本当に転校してきたとしたら、一体どんな名

前になるのだろう。

万が同じクラスになったら、クラス内での最終決定権は私にある。

いっそのこと、どめ色とかはどうだろう。

しかし、それで通るかどうかは、甚だ疑問だが。

と、私が自分の席（窓際の後ろから三番目。つまり前から五番目）に着いて、一人白んでく空を見ながら、悦しげに物思いに耽っていると。

ぎい　い　い　い

……。言い忘れてたけれども、紅苓棟の教室は全て二枚扉だ。もちろん押し開きなわけだが、普通はあんな音はたてない。

あんな音をたてるときは。

こっそりだったり、恐る恐るだったり、とにかく変に力んだまま開けようとするときだけだ。言っておくけれど、紅苓棟に限らず、青苓棟でもそうだが、紫苓棟以外の場所全てが無駄にだだっ広い。

この教室だって、阿呆みたいな面積がある。

窓際の五番目と言ったって、その後ろはさらに広い。

なにが置かれているかと言うと。

ソファだったり本棚だったりティーセットだったり、およそ学校の教室とは思えないものが置かれているのだ。

多分紅苓棟の生徒の中で唯一生まれついでブルジョワではない私だからこそその意見だろうが。

そんなもの、あるだけ無駄だ。

因みに本棚と言っても、参考書が詰まっているわけではない。漫画本やR指定系書籍ばかり。

せめてミステリー小説ならまだしも、とは思つ。

先生も見えて見ぬ振りするなよ、とも。

多分家に置いておくと使用人にバレるとか、そういうのが理由なのだろうが。

それをあつさり黙認してしまっている学園も、どうだろう。

と、嘆いてる場合ではない。

私はこの学園の異常さについて振り返るのを止めて、教室の丁度半分の位置にある扉の方向の見る。

そこには、朝焼けで青に輝く髪を持った、二人の男が立っていた。

その姿に絶句しないわけがない。

その男たちは全くの瓜二つ、だが瞳の輝きだけが違う。

双方とも、銀に輝いてはいるが虹彩が違う。

向かつて左が紅色。つまり、暁人だ。

そして、右は。

桜を見る度、想い出そう。

貴方の笑顔を。

桜が咲く度、信じよう。

貴方にもう一度、逢えんと。

桜が散る度、願おう。

貴方のあの瞳を、もう一度見せて欲しい、と。

知らず、笑みが零れる。

逢いたくて。でも、その手がかりも何もなくて。
忘れてしまえば全てを諦められるのに、それだけにすがって生き
ている弱い自分が、とても嫌いだった。

でも、とても現金な話、今は諦めなくて、忘れなくて良かったと、
心の底から思う。

貴方にもう一度、逢えたのだから。

緑に輝く銀の瞳を持つ少年は、唇だけを動かす。

キセキ、と。

そのことで、余計に感情は膨れ上がる。

私は扉の前まで歩いていくと、二人の目の前に立つ。

「お久しぶり、僑苡」

「……綺夕」

あの頃の面影を残すその笑顔に、夢ではないことを確認する。

夢でも、想像でも、16歳になった僑苡の姿は見えなかったから。

「転校……、してきたの？」

その問いに僑苡は頷く。

「そう。よろしくね、僑苡。」

それと私の名前、今は紫藤

緋月だから、うっかり校内で呼ばないでね」

「俺も…、今は海棠風葉って名乗ってる。海棠グループの養子に
なったから」

海棠グループといえば、日本でも十指に入る巨大グループで、紫
藤グループとも仲が良く、取引もある会社だ。

因みに弓削グループとは取引こそないが、仲は悪くない。」「…
いつ、養子に入ったの？」

扉の前の壁に凭れて、私と僑苡は会話を進める。

暁人はやや居心地悪そうにして、今は本棚の本に愕然としているようだった。

「綺夕が紫藤に引き取られてから二ヶ月後。半ば強引に籍を入れられて、名前も変えられて」

「でも、結局名前なんて最初から偽名だったようなものじゃない」「綺夕」は「キユウ」と読まれて「輝悠」となり、「僑苡」は「鏡威」となっていた、施設時代と、何が変わったのだろう。

赤ん坊のころに捨てられたとき、そこには一通の手紙が入っていたという。

この子たちに罪はありませんが、訳あって家で育てることができなくなりました。

ですが、この子たちを愛しているからこそその選択です。

どうか見捨てないでください。

女の子の方は綺夕、男の子の方は僑苡と言いますが、どうか別の名前で育ててやってください。

的な内容の手紙と共に、トランクにぎっしり詰まった札束が、施設の正面の道路に捨てられていたのだという。

一体いくら入っていたのかは知らないが、とにかく拾われた私と僑苡は輝悠と鏡威として育てられた。

施設側は徹底して口をつぐんでいたが、恐らく本当の親がどういう経緯で捨てざるを得なくなったのかは、臆気ながらに気付いていたようだった。

恐らく誕生日や血液型も完全に把握していたのだと思う。

紫藤に引き取られたときに義父が確認したところ、本当に十二月十五日生まれだったらしいから。

私と僑苡が自分の本当の名前を知ったのは、多分五歳のころだ。

誕生日も半月過ぎた大晦日、職員室のロッカーを片付けていると、一通の手紙がでてきた。

当たり前だがその手紙は実の母親からのもので、自分の名前が綺夕だということもそのとき知った。

何故‘綺夕’の読みが‘キユウ’でなく‘キセキ’だと気付いたのかは、良く分からない。

もともと輝悠と呼ばれてもしっくり来なかった私にとって、‘キセキ’は納得のいく響きにしか思えなかったのは確かだ。

「輝悠なんて、綺夕には似合わない名前だったな」

「そういう僞改こそ、鏡の威力だなんて、笑っちゃうわね」
相変わらず、兄はすごいと思う。

私をこんなにも、普通の感情にさせてくれるのだから。

また、心の底から笑える日が来ることに、今はとても満足している。

転校生は二人！！（後書き）

僑苡をよろしくお願いします。

新たな日常

そして時間は一時間程進み、SHRの時間になると、担任が入ってくる。

僑苡と暁人は空き教室に追いやられていたが、多分今は廊下の外にいるのだろう。

そう考えると、物凄く憂鬱だ。

何しろ、私も僑苡も暁人も、三つ子に疑われても可笑しくなくらいに似ているのだ。

何を言われるか分かったものではない。

そんな私の耳には、担任の声が聞こえているだけだが。

「で、今日は一限の化学が三限の国総と入れ換えで最後に転校生を紹介する。二人とも≫・・・

≫、入りなさい」

担任のその言葉に、クラスは一気に色めき立つ。

そして、二人が入ってくると

『つきや つつ!!!!!!双子!?!』

クラスの女子の大半が異口同音で叫んだ。

五月蠅いことこの上なしという感じだ。

「いや、今日出逢った赤の他人」 阿呆過ぎる。

そうやって釈明するからハモって余計に怪しいというのに。

「えーと、初めまして。海棠風葉です」

「初めまして、弓削暁人です」

につこり。x2

この二人のにつこりに、何故だか教室中が嬌声に包まれる。何事なのだろう。

私の隣の席の男子も、頬を紅潮させて二人を見つめている。

「え、ええと、それじゃ、この学園の案内は、委員長の日下^{くさか}。頼むな」

「はい、任せてくださあい」

委員長にしては少々派手目な少女が手を挙げる。

名前は日下^{みり}美里と言つて、家は高級エステサロンを経営していたと思う。

パーティにも積極的に参加していて、良く顔を合わせる。

そのため、私も多少なりとも彼女の性格は知っていたのだが。

一事が万事、こんな感じだ。

それも、男に媚売つているというわけではなく、ただ単に舌足らずなだけという、知れば知るほど面白い性格をしているのだ。

そんな美里に案内してもらえるなら何の文句もないだろうと安心して、ふと前を見ると。

「できれば紫藤さんに」

につこり。

私の人生、本当にろくなことがない。

けれどそんな私の心中とは裏腹に、頭の中には妙にアツい曲が流れ込んでくる。

でも、私にそんな青春なんて描けません、鵜島○文さん。

太陽が落ちるまで拳なんて握り合えません。その前に教卓の前に立っている二人をボコボコにしてしまいたいです。

ひとしきり鵜島仁○さんに謝つてから、私は前を見据えて最大級に顔の筋肉を使って笑つて見せる。

「無理です」

につこり。

につこり。x2

二対一という不利な状況のなか。

クラスはただ成り行きを見守っているだけだ。

担任はオロオロしているし、何より向けられている視線が痛い。

「大体何故私なのですか」

「「気心知れてるから」」

……殺意が湧いた。

とりわけ、暁人の方に。

勿論、そんな絶妙なハモリによる不用意な発言はクラスに絶叫を巻き起こすには十分だった。

「私たち、何時知り合いましたっけ？」

「一昨日」

「生まれたときから」

言っただろうというのだろう。

クラスの絶叫は更に大きくなっているし、耳も視線も心もそれぞれの意味で痛いのだが。

こんな時の唯一の救いは、紅苓棟が防音加工が完璧なことくらいだろうか。

これが青苓棟だったら、他のクラスにも伝播してしまうところだ。

「海棠さん、弓削さん」

できるだけ静かに言い放つ。

「一体何の打ち合わせ……」をしたのかは存じませんが、クラスメイトを使って《……》遊ぶのも大概になさって下さいね」

きつとこれで今までのイメージは崩れ去ったことだろう。

私は、来るべき新たな日常生活に、目眩を覚えながらも、腹をくくった。

新たな日常（後書き）

相変わらず遅くてすみません。

今はあまり暇ではないのです。（言い訳）

ところで、鵜島仁文さん知っている方って、どのくらいいるんでしょう？

幕開けは破壊音（前書き）

綺夕が壊れ気味絶賛進行中。

ほんとにかわいいやつですね。

これだから“完全無欠に見せかけて実は不幸系”キャラはやめられませんか。

幕開けは破壊音

「なあ綺夕。あの部屋は？」

「第三会議室」

「あつちは？」

「生徒会専用トイレ」

「あの壁は？」

「なんかベルリンの壁みたいだよな」

「紫苓棟」

「「資料棟？」」

ちつ。お約束のボケを。今絶対に資料のある棟だと思っている。

「紫。紅と青、両方いるから」

「うわー、安直」

「なにも思っていない癖に無理矢理言わなくて良いわよ、暁人」

まったく。一体どうしてこんな奴を案内しなければ
ならないのだろう。

腹腸が煮えくり返りそう。

そもそも、どうして金持ちはこつも自分勝手なのだろう。

僞苡はまだまだ。

少なくとも、大人しく付いてくるから。

でも、暁人は。

それはもう、さんざんだ。

人が案内しようとして、セオリーにトイレと学食から案内しよう
とすれば、何故か実験室の場所を知りたがる、実験室に案内してい

れば保健室へ行きたいだの、群がる女子生徒の方にやたらサービスするエトセトラ。

「綺夕、プールは!？」

第一、学校ではその名前で呼ぶなと言ったはずなのに。

しかも私の見る限り、暁人は会う度に性格が変わっているように思う。

最初はすれてないというか、いかにも良家の子弟という感じを受けたのに、その翌日には少し砕けたというか、普通に近くなったというか、少し高圧的な感じも受けた。

今日は。

一言で言ってしまうならば、騾のなっていない大型犬。しかも最悪なことに、このままでは飼い主ならぬ調教師は私になりそうだ。

「緋月、顔色悪いけど、大丈夫？」

「別に平気。風葉、は？」

言いつつ、僑苡の顔を見上げると、案の定顔色をなくしていた。

「暁人ってさあ、結局何者なんだろうね」

僑苡は私の問いに答えず、別の話を切り出す。

「もし生き別れの兄弟とかだったら、最悪ね」「じつは三つ子でしたって？そのときは実の親を恨むよ」

「生きてたらね」

二人して遠い目で暁人を見ながら話をしていると、業を煮やした暁人が詰め寄ってくる。

「二人してラブラブしてんじゃねーよ」

不機嫌丸出しなのは分かるとして、心なしか口調がぶつきらばうに聞こえるのは、台詞のせいだろうか。

「ラブラブって…兄妹に向かつて…意味が分からない」

「ハモるなっ!!」　なにをどう見たら、私たちが黄昏ているのを見てラブラブに見えるのか、不思議でならない。

「とにかく、あ・れ・は・な・ん・だって聞いてんだよ」

そう言つて暁人が指を指した方向を見たたん、私は絶句した。

「俺の目にはー、あれはー、生徒会室のー、中でつていう以前にー、神聖な校舎の中でもあるこの場所ですー、不純同性コージュとかいうー男のケツにー、カマ掘ろーとしている現場に見えるわけでー、ありましてー、あれは同意で俺たちデバガメなのかー、俗に言うゴークンなのかー、助けるべきかー、見ない振りかー、教師にチクるかー、どーするかー、聞きたいとこなんですがー……………綺夕？」

……………。

私は、もはや何に突っ込んだらいいのか分からなくなっていた。

その一、暁人のしゃべり方。

その二、それによるタイムロス。　その三、昼休みの生徒会室でコトに及ぼうとするゲイもしくはバイ。

その四、強姦。

その五、明らかに強姦されて今まさに裸に剥かれようとしていて助けを求めているにも関わらず、助けに入らずに傍観してあまつさえクラスの腐女子の子達に見せたら大喜びするのだろうか和現実逃避している自分。

私は息を吐いて自分を叱咤すると、

「もちろん、助けるわよ」

相手は理事長の孫だか何かだったと思う。義父の伝説を打ち破るのが目標と公言してはばからず、男でも女でも不細工でもなんでも喰う悪食野郎だとか、一晩のうちに六人相手しただとか、不穩な噂は絶えず流れていた男だ。

別にどうでも良かったが、まさか強姦までしていようとは。

流石の義父でも、していないと思う。

でなければ伝説になりようがない。

私は呆れ果てながら、生徒会室のドアを開けた。

否。

蹴破った。

修理代は幾らぐらいになるのだろうか、頭のなかで算盤を弾きながら。

それと、これで一段と騒がれるであろうことも、覚悟しながら。

平和に生きたいなあと、やっぱり黄昏て。

蹴破ったドアは派手な音をたてて木端微塵に吹き飛んだ。

幕開けは破壊音（後書き）

さて、綺夕は修理代を幾らだと計算したんでしょう？
気になるなあ…。

なりません？

とりあえず宣戦布告の前哨戦（前書き）

綺夕がなんだか妙に男臭くなっていました。

女は怖いってことで書いた話なのでお気になさらずさっさと読み流して下されば幸いです。

ところでタイトルに深い意味はありませんのであしからず。

とりあえず宣戦布告の前哨戦

だから一体私は何をしたというのか。

養子になってからそんなに誰かに迷惑かけたつもりは毛頭ない。

ああ、隠頓生活送りたい。

なんて、私が現実逃避している間にも、自分の身体は勝手に動いていて。

なんだか男子生徒をボコボコにしている気もする。

そういえば、何か拳が気味悪く濡れているような…。

「緋月、血が付いてる」

「うわー、こいつの血じゃん。不潔ー、消毒しないと無節操菌移るよー綺夕」

同じ顔同じ声、呼び方で見分けがつくのは楽。

けれど。

「学校ではその名前で呼ばないでって言っているでしょう？」

「別にいいだろー、何て呼んでも。俺の自由」

「…そう。じゃあ暁人のこと、今度からギョージンって呼ぶから」
「は？」

かなり予想外だったらしい。ほえ面を欠いている。

「風葉、聞いたわよねー。ギョージンって呼んであげて頂戴」

僞苡は頷いた。よし、勝ちだ。何がどう勝ちなのかよく分からないけど、何となく言葉のあやで。

「せめてジンとかあるだろっ…！」

突っ込みどころそこですか。

とりあえず僑政と顔を見合わせて、同時に肩を竦めて見せる。

「『ジン』とか無駄にカッコイイ名前、ギョージン君にはもったいない」

「もったいないって何だよ!!」

「…風葉、変な人がいるわね。『もったいない』って共通語なのに日本語知らなくても『もったいない』と『津波』は知ってるわよ」
「そうだな。『フジヤマ』、『ハラキリ』、『ニンジャ』、『スキヤキ』の世界じゃないもんな」

「随分古い日本感ね」

「風葉って意外と大正ロマン？」

ごんっ

今のは条件反射です、ごめんなさい。

けれど、身内を目の前で侮辱されて怒らないでいられるほど、私は人格ができてない。

おまけにむしろ明治だろうと思い、さらには文明開化の間違いだとまで思ってしまった自分に対する苛立ちも感じていた。

ほとんど八つ当たりに近いことは重々承知しておりますとも。

殴るだけでは飽き足らず、暁人の本気でおろしたての、制服の真新しいシルクのシャツに、暴漢の血をなすりつけてやる。

これは先払い。

多分隠しきれないから。

私が理事長の孫をぶっ飛ばしたことを。もう先生を呼んだ後だし、はつきり言ってこの紅苓棟の生徒の口に戸口をたてるなんて、やるだけ無駄だ。

そもそも元はと言えば見つけたにも関わらず、助けるべきか否か迷っているような奴だ。文句は言えまい。

「緋月、実は緋月も似たようなこと思ってたんだろ」

ぐさっ

「あゝ、まあ…。ただし、暁人みたいに大正ロマンだとは思ってなかったわよ」

「じゃあ、ダサイとか」

「や…、明治かな、って」

「綺夕のほうが酷いじゃん」

ぐささっ

なんだかやつぱり暁人とも血が繋がっている気がしてきた。
思考回路が同じだ。

少なくとも私と僑苡が双子であることは確かだから…。

つまり、三つ子…なのだろうか。

「緋月、どうかした？大丈夫…？」

僑苡の心配そうな声で現実を引き戻される。

自分で考えて、馬鹿馬鹿しいと一蹴できずに硬直してしまうくら

いにありえそうな話だ。

僑苡と私は施設育ち、暁人は弓削家の跡取り息子、そして僑苡も私も今は同じように名家の養子だ。

むしろ、これだけ何もかもが同じで全くの赤の他人だったら逆に怖い。

世の中に自分と同じ容姿をしているものが三人いるというが、そのうちそれがこうも男であっていいはずがない……と信じたい。

ドッペルゲンガー的存在と考えるよりは、三つ子でじっくり来ようというものだ。

「なんでもない、大丈夫よ。それより無事でないのは……え、っと、真名月先輩……でいいんですね。 こちらだから」

そう。大正ロマンやら文明開化やら明治維新（言ってはいいない）だの馬鹿げたことを言っている間に、着衣は整えてくれたらしい、被害者だ。

「あ……僕は大丈夫だから」

嘯いているが、はつきり言って顔色が悪い。

恐怖から抜け出せていないのが丸分かりで、身体に力がかなり入っている。

「……全然大丈夫に見えませんか……」

三人同時に言っ、僑苡と暁人はそろい過ぎて一人分のようにも聞こえるのに、私の声だけ高くて妙だった。

真名月先輩はぷつと吹き出す。

笑われるのは不本意だったが、それで身体の力が抜けたようだから、安心した。

「三人とも同じ顔だね。言い方まで一緒。因みに眉のひそめかたもね」

ほぼ初対面に近いはずの人にまでそう言われるのだ、もう諦めるしかない。

暁人に確かめよう、別の場所です。

できれば義父にも同席させた方がいいのだろう。

私に別の名前を名乗らせるあたり、どうも出生について知っているそうだな。あるいは、共謀したか。

いずれにしても、義父が全くの白とは思えないのだ。

でなければ、どうして婚約者として暁人を持ってこれる？

婚約を決めたのは祖父同士だと言っていたが、最初からそれが狙いだったとしたら…。

そこまで考えて、馬鹿馬鹿しいと思う。有り得ないとは思わない。ただ、これではまるで陰謀論者のようだ。

そう、性急になることはない。

むしろ、慎重でいなければならないだろう。弓削と紫藤の間に確執を生まないためには。

絶対、吐かせてやる。

とりあえず宣戦布告の前哨戦（後書き）

相変わらずの亀っぷり。

何だかんだで一ヶ月に一話進むか進まないか…。

根性なしだったら亀と言つても烏滸がましいことに気がきました。
とりあえず泥のような根性だけが取り柄です。

苦痛は激しさをまして

散々だった昼休みを終え、私たちは教室へともどった。

「紫藤さん、今まで校内案内してたんでしょう？何だか騒がしいのだけれど、知ってる？」

「柚木さん…、世の中には知らない方がいいこともあるんですよ…」
疲れた。無論柚木さんに悪気はないことは百も承知だ。

「それじゃ怪しいってば、緋月」

「…百歩譲って暁人や風葉が疑われたとして、私まで疑われることはまずないから」

「流石優等生」

「それ以前に私は女」

「中身と行動は男な癖に」

「基本男嫌いだけどね」

私は男が苦手だ。嫌いな理由は色々あるが、最大の理由は逆玉の興狙いで近寄る男が私の周りに多すぎるからだろう。

私が紫藤の血を汲んでいないと分かれば、見向きもしないだろうに。

優等生然とした外面の裏で何を思っているのかさえ見抜けないような男と付き合うつもりは全くない。

私の心の裡はきつと、人を見下しているだけにしか思われないのだろう。そんなことはアメリカに渡る前から自覚していた。

当時はそれで人並みに悩んだつもりだが、アメリカで自分より年上で、考えも大人な人間たちに接するうちに、見下されても仕方ない態度をとるのなら、権力なんか関係ない気もして、開き直ったというか居直ったというか、意思がはっきりしたと思う。

勉強を片手間に片付けつつ、アメリカにいたほとんどの時間を人間観察に費やしていた当時の自分は、何と気儘でマイペースな人間だったことだろう。

惜しむらくは、それから数年が経ち、現在に於いて、そんな精神的余裕がないことだ。

でも、何故だろう。

憤りや本気の呆れなど、ここしばらくは皆無だったのに、今は専ら喜怒哀楽の『怒』ばかりがよくでてくる。それが少し、まだ私を人間に留めておいてくれているのかもしれないと思う。

私は自分が異常であることを理解している。

異常でなければ、どうして善人の仮面を被ってしかし、心の裡では過去にしがみついて現実から離れようとするのか。執着を感じるのは過去の記憶だけ、現実はどうでも良く、自分の感情よりも一般的な人間がどんな行為にどんな感情を抱くのかのみで判断してきた。誰かに理由を付けて死んでほしいと言われれば、何の躊躇いもなく死ねる気さえする。

痛みがどうか、死んだらどこへ行くのかというような不安も、感じたことはない。生に執着は持っていないし、またそうまでして生きたいと思えたこともない。生きていることは、只の苦痛ではない。

どうして人を殺したがるのか、好きになれるのか、嫌いになれるのか、あまり分かってはいない。

ただ、自分の意向を無視して効率の悪い方向ばかり行くのは嫌気が差す。一般的なモラルの何たるかは理解していたが、それでも所謂人間的な感情による行動というのは、なかなか取れない。

私のような人間が一番危険であることも、理解している。

だから害にならないように矯正しようとする人間がいるのだし、彼らには彼らなりの正義があるのだとも思う。

そういう所謂“善人”たちは、人権がどうのこうので、それを私のような人種に当てはめる。傍観者たちはそれを見て感動し、また同時に、それに従おうとしない者に侮蔑の視線を投げ掛ける。

根本にある価値観が全く異なるのならば、それを型に当てはめるのは苦痛でしかない。

放っておいてくれればいいと思う。煩わしくて仕方がないと思うのなら、いつそ分かたれてしまえばいいと。

臭いものには蓋をして、人間はいつでも見逃してきた。

だからそれで構わないのだという思いをこちらも抱いているのだと、なぜ気付いてくれないのだろう。

「緋月？どうした？」

僑苡が話しかけてくる。私が何も見ていなかったことに気付いたようだ。

「別に、……………何かあった？」

「いや何も無いけど…疲れてんのか？」

「そうねえ…。思春期特有の悩みってことで」

「何か知らねえけどさ、お前の場合一生引きずりそうだな」

また縁起でもない、と笑って答えてしかし、その通りだと思う。

世界と自分との齟齬は、これから私を苛み続けるのだろう。

なまじただ思い出しがみつくだけだったその人物が、目の前に立っている。

僑苡が私を現実へと引きずり出す可能性だつてある。

私が願って止まなかった再会はただ苦痛の色を濃くしていくのみ、それは坂道を転げ落ちていくのと同じように、加速していき、だがしかしその先は平坦な道ではなく無明の闇、堂々巡りしかできない思考の中を永久にさ迷う流離い人となるのだと、このときはっきりした。

苦痛は激しさをまして（後書き）

綺夕の思考は一生ものだと思います、このままでは。

さて、僑苡と暁人は助けられるんですかね：（え、そうゆう話だっけ！？） 予定にありません。綺夕が勝手に暴走した結果です。

語り出し

僑苡と暁人が転校してきて数日後。

私は無理矢理義父を捕まえ、屋敷の大広間に座らせている。
当然、僑苡と暁人も同席している。

「さて、お義父様。今日は折り入って話があります。何の話か、ご見当は？」

「やれやれ。うん、ついてる。 お疑いの通り、緋月と風葉君と暁人君は三つ子だよ」

「 それもありますけど、それなら何故……」

「んー？誰が緋月と暁人君を婚約させたかつて？」

「いえ、止めなかった貴方も貴方です」

「あははー、風葉君厳しいね」

「さつさと答えて下さい」

「えー、しょうがないなあ……」

義父……もとい柊さんは、へらへらと笑って答え始めた。

私にしてみれば、どんなに顔がよくても、どんなに金持ちでも、
こんな男はごめんだ。

今度のことで、改めて思った。

「つまり、風葉君と暁人君と緋月は、元々は 弓削家と海棠家
とここ、紫藤家の共通の友人の家の子供でね、まあその人が誰かは
言えないんだけど。とにかく……、大金持ちでウチなんかより遥かに
規模がでっかい家系があるんだけどね、その直系の子供」

「『それが？』」

「んー、その家系つてさあ、やたら双子が産まれるんだけど…大体40パーセントの確率で。君ら三つ子でしょ？」

「つまり、鬼つ子というわけですか」

望まれない子供。だが、直系にも関わらず、何故自分たちが鬼つ子なのか。甚だ疑問だ。

「そう。でも、それより厄介だったのが、その髪と目。君らはその家系の双子の……特に先に産まれた方が持っている性質を、よりもよって三人とも持って産まれてきたんだ」

「話がまったく見えません、お義父様。それが何の問題になると仰るんです？」

すると、柊さんは穏やかに笑った。それは悟りを開いた者だけができる、穏やかに風が凪いでいるような、老成された笑みだ。

思わず鼻白む私の方を向いてから、また柊さんは口を開いた。

「普通、その家系に産まれる双子の、先に産まれた方は100パーセント“璃”と呼ばれる、特殊な目を持っている。君らの目が、それぞれ蒼銀・緑銀・紅銀のようにね。ただし、君らのように彼らは銀の瞳はでた試しがない。白はあってもね。」

それに、産まれた全ての子供が“璃”を持つなんてことも無かった。先天的にはね」

「つまり、後天的にはあったってことですよね」

「そ。双子の先に産まれた方っていうのは、概して短命。で、そのあと双子の後に産まれた方が覚醒したりしなかったり…五分の確率かな？そのくらいで。だからつまり、君らは異常と見なされたわけ」

そう言われることは、話の流れと性質上、覚悟はしていた。
けれど、実際に言われると、構えていた何倍もの威力で襲いかか
って、私の心に突き刺さる。

「といっても、奇跡だってね。とても持て囃された」

柊さんのその一言が、私の胸中に混沌を産み出す。一体、どうい
う意味だろう。

「けど、君らが産まれたのと全く同じ日 12月17日かな。
本家で、もう一つの異常が起きたんだ」

その穏やかな笑みを崩さないまま、柊さんは一つの物語のように
言葉を紡ぎ出した。

語り出し（後書き）

気が付けば87日。何故こんなに放置していたかと言いますと、その間本文の“ある家系”の本家の双子を中心とした家系図の製作など、非常に馬鹿馬鹿しい程細かい作業を連日しておりました。（ただのアホ）

その過程で出来上がってしまった（しかも超膨大）の小説も、打ち込む時間さえあればいつか公開したいと思います。

決してサボってた訳ではありませんので見捨てないで下さいっ（嘘。）

次回は割りと早く仕上がる筈…です。

瞳

それは、16年前の冬の日の奇跡だった。

その界限では最も有力で、遙か古代より日本に確固たる家系として存在しており、現在も全く衰えることなく、むしろその大きさが日本を越え、世界にまで広がっている、特殊な家系でのことだった。俗に裏家と呼ばれるその家系に、その日五人の子供が産まれた。

12月17日のことだった。

広い本館の中をぱたぱたと、真崎佑那まさきゆうなが走る。

メイド姿ではないが、古来よりこの家に仕える真崎家の人間で、年齢は25。彼女は今、連絡係として当主の部屋へと急いでいるのだ。使用人とはいえこの家に仕える全ての人間が、この家の世間から隠された始祖の代より仕える人間のため、扱いは親戚のようなもので、使用人というよりは家庭内の割り振りという感が強い。

今や、差は無いに等しい。当然、当主に会うのに畏まることもない。

3階の一番北にある部屋の前で、佑那は軽く息を吐いて桜材の重厚な扉を叩く。

『誰だ？』

奥から声が響いて来る。当主代行の万璃の声だ。

「万璃様、佑那です」

『入れ』

佑那が扉を開けると、丁度万璃は書類の確認をしていたらしく、デスクの上はファイルが積まれ、紙が散乱している。

当主である万璃の父・皇璃おうりは現在双子の弟・楼璃と共に海外旅行中で、今ごろは豪華客船の中だろう。共に妻を亡くした身であり、一卵性双生児でもあるため、大変に仲が良い。

そんな事情で、万璃は当主代行として奮闘しているのだ。

「どうした？佑那」

「それが…。実は先程、例の三つ子が誕生したのですが……」

「？それは喜ばしいことだろう。何故そんな顔を……」

「そ、その…。どうやら、三人が三人共、“璃”らしくて……」

「な……っ」

先程まで、とても42とは思えない程の甘い笑顔をしていた秀麗な顔が、複雑に歪む。

通常“璃”は一卵性だろうが二卵性だろうが、双子の先に産まれた方が持つ。

これまでに、三つ子は幾つかあった。

ただそのどれもが、一卵性＋二卵性の場合には一卵性の先に産まれたほう、全て二卵性だった場合は一番最初に産まれた子供、ごく

少数の例でしかないが、全で一卵性だった場合にも一番最初に産まれた子供が“璃”だ。

今日この日まで、例外はなかった。双子の場合でも、二人が二人共最初から“璃”であるということも無かった。

万璃やこの家に関わる全ての人間は、そんなことは有り得ないと無意識に信じていたし、揃い子以外に“璃”が産まれるということも無かった。

全く、異例の事態だったのだ。

万璃はしばらく考え込んでいたが、やがてポツリと言った。

「だが想定外とはいえ、喜ばしいことに変わりはない。御当

主に報告し、名前を考えて貰わねば……」

「そうですね。ところで御当主は今……」

「カスピ海だと言っていたな。相変わらず二人で気儘に旅してるらしい」

「それでは当分戻りませんわね……」

沈黙が下りる。皇璃も楼璃も優秀なのだが、昔から勝手なところがある。

楼璃はともかく皇璃は敵が多いというのに、本人は今回のようにふらふらと旅行にでかける。警戒心のなさにかけては、他の追隨を許さないのだ。尤も、最強の“璃”である皇璃にとっては何の問題にもならないのだが。

「とりあえず、会いに行こう」

ふわりと優しい笑みを見せて、万璃は席を立つ。

佑那もそれに従い、並んで歩き出す。

通常、産まれたばかりの子供が“璃”であるかどうかを見極めるなどという行為は行われない。しかし双子以外の揃い子の場合にのみ行われる特殊な検査がある。

現在脳波を測定するというものが専ら用いられており、ご多分に漏れず、三つ子も測定された。

「結果は、3C 1、A：+++。つまり、未知…か」

二人目に産まれた子供の分の書類に記載されたデータを見て、万璃は深くため息を吐く。

3C 1 自体は特殊なことではない。並みには強い方だろう。

しかし、A：+++というのは未知、つまりは虹彩は並み、力としては測定不能ということになる。

一人目のデータを見ると、結果は3C 1、A：+だった。これは測定許容範囲内であるが、虹彩の顕す力よりもワンランク上、つまりは万璃の持つ『強』の“璃”である白もしくは万璃の亡くなった双子の兄・堇璃ぎんりの持っていた紫と同程度の力であることを示す。

3人目のデータに移ると、今度は3C 1、A：-という結果だった。数値を見る限りは、力は並みということになる。

「だがそれなら何故Aが…」

Aは能力の高さと、常にはない形質のどちらか一方、或いは両方を持つ場合に付く値だ。

先の二人は確かに異常だった。しかし、三人目の子供にどうしてAが付くのか、万璃には分からない。

「万璃さん。恐らくとは思いますが、三人とも形質が特殊な可能性が…」

「しかし、3C 1だ。これは形質が異常とは…」

脳波のパターンにより、その種類は測れる。3C 1は並であり、
本来Aがつく理由はない。
本当に、異例の事態だったのだ。

瞳（後書き）

書き上げていた別のこの家系の小説では全く皇璃の性格について触れていなかったのですが、書いていて既に自由に動き回ってくらえています。

どうやら当主と言うのも烏滸がましい位のちゃんばらんな性格みたいです。

徘徊老人だと思って優しい目で見守ってくだされば有り難いです。

予言

しばらく考え込んでいると、今度は内線が入る。

「万璃だ。 どうした？」

『万璃様、その…お孫様がお産まれに』

そのことは、忘れていた。 いや、時間的にも同じであったために、三つ子の方にはかり気を取られていて、ではあるが。

「そちらは、普通のような…」

ほっとした様子で、万璃は呟く。 これ以上問題を増やさないで欲しかった。 何しろ、全権を任されているとはいえ自分の正式地位は“花皇”。 最終決定を下すには躊躇いがある。

何はともあれ、万事明日に流すとして、万璃は仕事に戻ったのだ。 った。

それから数日。 三つ子の処遇も決められないまま、五人の子供は目を開けた。

そして例によって祐那が駆けつけてきたのだった。

「万璃様、例の…っ」

としか言えないのは、まだ子供に名前が付けられていないからだ。 「どうした？」

「目を、開けたそうです」

万璃に嫌な汗が流れる。 それは確かめるのが、怖い。

とはいえそうも言っではいられず、万璃は子供たち五人が居る部屋へと向かった。

入室すると、これまた皆が万璃を複雑な表情で迎えた。

当の子供たちは、三人は泣き、二人はそれを煩そうに聞き流しているからだろうか。

泣いているのは三つ子の方、という訳でもなく、産まれた順に並んだベッドの、丁度奇数の三人だった。

「普通は、つられて泣くものなんですけどね…」

医師の顔も引きつっている。何しろ、泣かない二人は揃いも揃って、産声を上げたきり、意思表示をしないのだ。

否、五月蠅いという意味表示はしている。顔が、目が、大人たちに向かって『泣き止ませろ』と訴えている。非常に、乳児らしくない。

つまり、この二人は生後数日で、自我が確立している可能性もあるのだ。未恐ろしいことこの上ない。

「…とにかく、瞳は確認したのか？」

「ええ、全員。三つ子は全員銀…前例がないので何とも言えませんが、とにかく経過を見て…」

「だが、3C 1だぞ？それは…」

「確認いたしました。どうやら、“璃”は二色、銀と赤・緑・青の…」

「それこそ、前代未聞だな…」

「アレキサンドライト…。二つの色を持つ者、なのでしょうけれど…」

“璃”ですからね、と医師は続ける。

“璃”に何の意味があるのか、はつきりとは分かっていない。正直なところ、その瞳の持つ強さも、一概には言えない。

だが、このその手の界限からは古代より『裏家』と呼ばれているこの家系では、こんな言い伝えがある。

曰く、『誰にでも心の奥には獣を飼っている。その獣が表面に出た者には幾つもの心がある。そしてそうでありながら一つの“何か”を貫く者こそ、真の当主であり、また、それは同じ日に男と女、それぞれ一人づつ近き血で産まれる』と。

それは『裏家』の初代が言った、予言であつた。
そしてその後には、こう続く。

『共に家からは離れる。

その別離は家を傾ける。

男は硝子から反射する光の蒼さが翳る頃水と炎とに挟まれて、女は狂った利己的な大人の暗い欲望によって、それぞれに傷を抱えて歩き出す。

朱にまじわれば赤くなることはなく、それぞれはそれぞれの獣を胸の裡で劔と成し、輝きを増す。そして比類なき強さを持った二人は、その傷を癒せぬまま大人になる。抱く思いは忘れ、傷を深くしていくのみ。最強で且つ天つ才を持つ者は、孤独と孤高に果てはなく、

あるのは星のない満月の夜と砂漠であり、朝は来ない』

その予言は、書物にしか残っておらず、誰も知らない。知っていれば失敗を侵すことはなかっただろう。少なくとも、当主さえ知っていれば、男は助かったであろう。苦しみ続けることはなかった。女は 助からない。それは避けようがない。

『男も女も、心の数だけ名前を持つ。それは全てが本場で、全ては偽りである』

万璃はおるか、皇璃も楼璃も、それを知らない。

年の暮れ、静かに『裏家』に鎬矢が放たれたことを。

『終焉の篝火は緑。赤と緑が銀に乗って風となり、炎を昂る。そして黒き炎となりて、焼き尽くす。紫と金の傍観者は蒼を殺めて炎を沈めるだろう』

予言（後書き）

色々起きちゃいます。でも血統断絶はないですよ。

隠蔽工作とか人さらいとか人身売買とか証拠隠滅とか。

影

「で、双子は……」

「金です。これは……」

医師の声も尻すばみになる。前代未聞の色に、最強の色。何が起るか分かったものではない。

「……通常、当主の指示を仰がなければならないが……仕方がない。この、三つ子と双子は本家で育てる。いいな？」

「はい。当主も反対なさらないかと」

「さて、名前はどうなるかな。予想するか？」

「万璃様……。また難しいことを」

「悪いかな？それともネタ切れかな？」

何しろ、有史以来何人の“璃”がいるのか数えるのも億劫になる位いる。時代がどうであろうと、この家系は“璃”には必ず『璃』と付けてきたのだから、半端な数ではない。

その中から被らない漢字を探して、尚且つその代にいる他の人間と音が被らないように名付けなければならない。

つまり、一気に五人はきついのだ。

「まさか。まだ“ゆური”が残ってますよ。定番じゃないですか」「ふむ……。 “ていり” とかはどうだ？」

「定理ですか？学校でいじめられそうですね」

「理数は強そうだな」

「それより、やっぱり“ゆური”ですよ」

「まあ、可能性は高いが……和真」

「はい？」

「柚璃を忘れられないのか？」

「……」

和真は押し黙る。すると、静寂の満ちる部屋には子供の泣き声だ

けが響き渡る。

親は今席を外しており、宿めるものもないので、そのままだった。

「……いえ。ただ、忘れられないのはむしろ……御当主でしょう」

「……。決断を下したのは、良叔父様だったからな……」

「……そう、なんですか？」

和真は驚きに目を見張る。柚璃にアレをやらせたのは、皇璃だとばかり思っていたのだ。

「酷い、ですよ。人柱と、何ら変わらない……。それなのに、系図からは消されて、記録は正史にしか残らない。あまりにも、報われなさすぎですよ」

柚璃は100年に一度の大神事“奉源祭”で死んだ。片割れで姉の舞璃も既に亡くなっており、二人の名は表面上の系図 社会一般に開いている系図 からは消されてしまった。

和真は、その柚璃のあった証拠を残したいのだ。

韻が同じ名前は、番号が記載される。次の“ゆつり”と、その前の侑璃の間に抜けた番号があるだけで、その推測は容易くなる。和真は、それを狙っているのだ。

「なら、この中の紅一点には、“まいり”と付けるか？」

「分かりません。ただ、それは御当主の判断です」

可能性は幾らでもある。柚璃に落ち度があったわけではなく、更にそれより前に死んでいる舞璃は、柚璃の姉という理由だけで抹殺されているのだ。他ならぬ、前時代的慣習によって。

皇璃の考え方は斬新だ。切り込み方の鮮やかさにはばかり目が行ってしまいがちだが、まず視点が違う。それそれはたとえるならば、

紙に墨を垂らしたものが何に見えるかと問うたとして、万人は『薔薇』と答えるのに対し、一人だけが『途方もない引力を持った強烈な白い光』と答えるのと同じだ。万人には広がっていくように見えるものが、一人には集約していくように見えるのだ。そのくらいに、皇璃の視点は違う。

「…さてな。まあ、心配はいらんだろうが……」

「何しろ、曾孫様ですしね…。一気に五人も曾孫ができて、慌てていたりして」

「ははは。そうだな。私だって孫が五人だぞ？ 瑠璃も玻璃もやってくれる…」

「とはいえ、合計で六人。蒼夜さんが拗ねないといいんですが…」
双子と三つ子は、万璃の息子で一卵性の“璃”である瑠璃と玻璃の子供だ。つまり、従兄弟同士である。だが、三つ子の生まれた方玻璃には既に7歳にもなる長男・蒼夜がいる。これから何かと手のかかる時期になっていくのに、果たして平等に面倒を見れるかどうかは分からない。

名前で分かるとおり、蒼夜は“璃”ではない。どうしても、後に産まれた“璃”に関心が行ってしまう可能性が高いのだ。

「まあ、それは玻璃の試練だな」

あっさりと責任を放棄して、万璃は笑う。和真は呆れた様子を隠すことなく、万璃を見据えてため息を吐く。

その様子をじっと見ている影に、二人はとうとう気付くことはなかった。

影（後書き）

さて、影さんの正体は？？

選択は運命を揺るがすに足らず（前書き）

タイトルそのまんまですね。

すっかり綺夕たちの“璃”の名前（＝本名）を忘れて更新遅れました。すみません。

選択は運命を揺るがすに足らず

それは唐突だった。

五人の“璃”が産まれて約十日後、漸く皇璃の元にその知らせが届き、帰国の目処が立ったと言うのに、肝心の“璃”が拐われたのは。

クリスマスが終わり、年末に向けた祭祀の準備に皆が動き回っていた頃。

名の無い子供が三人居なくなった。

銀の“璃”を持つ三つ子の方だった。

その事実に見つ先に動いたのは、他ならぬ万璃だった。

彼は連日ありとあらゆる情報を駆使して三つ子の行方を探した。

そして辿り着いたのは。

三つ子の母、亜美その人だった。

直ちに万璃が問い詰めると、亜美はどこか病的な笑いを以て答えた。目は正気を失い、虚ろな光と孤独を映すのみだ。

「これ以上…息子たちを好きなようにはさせないわ。蒼夜はまだいい。“璃”じゃないもの。ある程度安全でしょう？けどあの子たちはね、折角産まれたのに名前すら親に付けて貰えない、しかも制限がある…。おまけに見たこともない色ですって？そんなの…大人のエゴじゃない。私は私の子供を守るわ。…ふふ、名前も付けてあげたの。可愛い可愛い名前をね」

くすくすと笑い続ける亜美の顔は、それでも幸せに満ちていた。

「…。その通りだろう。だが…」

「見つからないわよ」

言い募ろうとする万璃を遮り、亜美は言った。

「どういうことだ？見つからないとは…」

「いくら裏家だって、見つからないものは見つからない。一人はね、預けたのよ？ちゃんとした友人に。名前を教えて…。けど、後の二人はどうしてることかしら…。居場所が判明する頃には手遅れかもね…」

その後亜美は鬱病であることが判明し、療養生活に入った。

亜美の言葉がどういう意味なのかは確認されておらず、その数年後皇璃が亡くなり、万璃が当主となった。楼璃も皇璃と共にこの世を去り、瑠璃とその息子の双子の兄・悠璃、そして蒼夜の乗る船が沈没して瑠璃が亡くなり、悠璃が行方不明になった。

双子はそれぞれ夏野と昂璃、三つ子は風葉と緋月と暁人として成長し、現在に至る。

「では、何故誕生日が…」

私の誕生日も、僑苡の誕生日も12月15日で、この間過ぎたばかりだ。

そう。何とも阿呆なことに、この二人は期末も終わった学期末、全くもって空気の読めない転校をしてきたのだ。何に焦っていたのかは知らないが。

「それは母親が改竄していたらしいよ。暁人君も12月15日だと教えられているだろう?」

「え、まあ…。でも、それよりも…悠璃が行方不明で夏野ってやつになったってことか?」

「…まさかとは思うけど、それって浅葱夏野ですか?」

「おや、知っているのかい、風葉君」

「僑苡でいいです。…ええ、浅葱夏野といえば、全国区ですよ。4メートル越えて、オリンピックの優勝候補。ハイジャンの期待の星。そんなフリースは嫌でも目につきますからね」

「…インタビュースラ逃げる人だったっけ」

思い出した。細身で柳みたいな印象だった。

髪質が僑苡に似ていて、何となく記憶にある。

見たのはインハイ、今の時期、聖苓は部活停止期間だから活動していないが、私は陸上部だ。種目は棒高跳びで、一応は決勝まで残った。優勝を逃したのは、アメリカ時代にやった事故での古傷のせい。その日は天気も良くなかった。台風が迫っていたから。今はもう、ないけれど。

その傷を治そうとは思わなかった。普通に残ることを、受け入れていた。だが人間には利己心がある。それが働いた。

優勝を逃した瞬間、自分に初めて芽生えたその想いは、何故か簡単に叶った。

一週間後、そこには何の傷もなかった。

「…そう。道理で似ているわけだ」

「何が？ 暁人」

「顔。確かに、俺達三人は似ている。完璧な三つ子だ。けど…目の放つその人の人柄とか、決意とかって、全く異質だ。でも、夏野は同じだ。綺夕の目と」 また、暁人が別な性格を見せる。掴み所がない。軽いのか、何なのか。飄々としているようで、その実深い人間だ。弓削家の男なのかもしれない。

「そうそう。君達の本名は、僞苡君が惻璃。惻惻の惻ね。それで“れんり”。緋月は夕璃。穴に夕でね。嫌な名前だろう？ それで暁人君が蓬璃。放り投げちゃったけど、本当は逢いたいって言う意味で掛けたみたい。末っ子にやるのがミソだね」

結局、私は綺夕で輝悠で緋月で夕璃。そんなに名前は要らないのが正直な気持ちだ。

「夕璃は、特別な名前だから」

穏やかに笑った柊さんの顔が、それとは裏腹に事の重大さを指し示していた。

「君は悠璃の裏、つまり、祭祀上のパートナーだ。裏家はその義務もある。悠璃が正式に花皇を承諾した場合、君も強制的に裏花皇となる。けれど、手放すつもりはないよ。これまで“緋月”を放っておいた、当主が悪い」

あれは、何の本だっただろう。

太古の昔、国を左右するほどの祭祀を行うものが居たことを書いた、古い本。

今は絶版となった、その書籍には。

「裏家筆頭に、悲しみを湛えた二人の花皇が陰陽に別れる事なく立つとき、

国は平和と栄華の道进行することになるだろう」

何故、自分なのかは不明だ。

けれども、私は私で居られることを祈る。変革は望まないのだ。保守的という意味ではなく、ただ平穩にひっそりと生きられれば構わない。

「お義父様」

決意は固まった。否、自分の意志など固めなくとも、柊さんはそうするのだろう。

「生家に戻るつもりはありません。…けれど、緋月で生き続けるつもりもあります」

柊さんの顔は、ただ老獪な笑みに彩られていた。

選択は運命を揺るがすに足らず（後書き）

まあ妥当な所かと。

将来は決まってるけれど…ね。
そこは秘密

過去の欠片

「どういう意味かな、緋月」

柊さんは笑みを崩すことなく問うてくる。私の言っている意味などとうにお見通しの癖に、性格は本当に最悪だ。

「どうもこうもありません。私は今さら生家に戻るつもりはありません。ですが将来は夕璃として生きることを望む、と申したまです」

「ふうん。随分かしまった言い方だね。どうやら自分の発言の重さは理解しているようだ」

くすくすと柊さんはひとりごちる。

「お義父様こそ、私がこの話を切り出した時点で分かっていたはずですが」

「…嫌みはもういいよ」

「では認めてくださるんですね？」

「ああ、構わない。どうせ裏家に戸籍なんかないんだ。…つまり、緋月が夕璃に戻ろうが戻るまいが戸籍はそのまま紫藤家のものだからね」

くすりと笑った柊さんに、何となく安堵した。

それから数日後、相変わらず微妙な毎日を消化していると、どうやら平穩はあつという間だったらしい。

放課後、いつものように帰り支度をしていると、放送がかかる。

『紫藤緋月、海棠風葉、弓削暁人。以上の三人は至急生徒会室へ』

呼び出された理由は分からなくもない。先日 の件についてだろう。あの下半身無節操男は、生徒会とも関係が深かった筈だ。

「緋月、どうする？」

「何が？」

「雲行きが怪しければ、この学校買い取っちゃえばってこと」

「風葉…。それはやめて」

「僑苡も大分金持ち思考に毒されている。むしろ私がおかしいのかも知れないが。」

「ふうん。綺夕って案外常識人？」

「…暁人。私はいつでも常識人よ」

「アンタやこの学校の紅苓棟の生徒と違って。」

「つもりじゃなくて？」

「…死ぬ。ウザい」

「一々細かいところに反応されれば、いい加減鬱陶しい。」

「風葉、行こう」

「僑苡の腕を取って教室を出る。そのころには既に教室には誰も居なかったから、その姿を見られずに済んで良かった。」

「生徒会室は入ったことがない。何度か勧誘が来たが興味はなく、実を言えば生徒会メンバーの顔もよく知らない。」

「今日初めて叩く扉は厚い。意を決してノックしてみると、返事はすぐにあつた。」

「名前と所属を」

「一年紅A組、紫藤緋月です」

「同じく海棠風葉です」

「弓削暁人です」

「どうぞ」

「返事を待ってから扉を開けると、そこに立っていたのは美形ばかりだった。」

「ようこそ、紅苓棟生徒会執行部へ。僕が副会長の柁木芳徳。よろしく」

「思わず面喰らって立ち尽くしていると、甘い顔立ちをした男子が」

近づいてきて自己紹介を始めた。これは歓迎の証と取るべきか否か。
「うわー、三人とも同じ顔！！…あ、はじめて。俺は書記長の神崎護ね。噂はかねがね聞いてるよー」

今度は金髪のチャライ系だ。聖苓は校則に厳しくはないが、耳に穴を開けて何が楽しいのか分からない。手入れが面倒なだけだろうに。しかも、書記長はそれを何個もぶら下げている。軟骨に穴を開けるのは痛いと感じたことがあるが見ていて本当に痛々しい。耳殻のみならずその内側まで開けているのだ。全くもって理解できない。
「へーえ、これが今年のナンバーワンかあ。こーやって見るとドアを蹴破ったなんて信じられないんだけど」

書記長の耳を凝視していると、ふいに顔を覗き込まれてのけ反る。
「…ナンバーワンって、何ですか？」

「うわー、自覚なし？」

書記長があんぐり口を開けている。一体何だというのだろう。

「ま、簡単に言うとその年の一番容姿の整った人ってことだな」

また別な人間が話に入ってくる。今度は少女漫画であれば主人公の相手役なルックスで、気の強い目が印象的だ。

「俺が会長の蓮見響夜だ。因みにはじめましてじゃない」

とはいえ、直接の面識はない。僑苡や暁人の方を見ても同様だった。

「はあ…。ですが、なんでナンバーワンだとかなんだとか決めてるんですか？」

「そりゃ、美の追求でしょ。人間の心理に基づいたものだと思うけどね、輝悠」

「…！！」

「鏡威も輝悠が可愛いと思うだろう？」

「…！！」

私はその名を使用していたのは、柊さんに引き取られる前だけだ。それは僑苡も同様の筈だし、他人にばらすようなことはない。だから、知っているということは施設の出身かその関係者ということに

なる。

「貴方は…」

「覚えてない？真尋だよ」

「ヒロ…？」

佐野真尋。そう、確かに施設に居た。私や僑苡と同じように、生後一週間で施設の前に捨てられた子供だった。真尋は一コ上だから、物心ついたときからの仲だ。私と僑苡と仲が良く、三人でつるんでいた。忘れるわけがない。

「そ。輝悠が居なくなつて、鏡威も引き取られてから…ちよつとして蓮見家の養子になった。名前も変えられたしね、分からなくても仕方ない。けど、二人とも変わらなさすぎる。顔はともかくその性格」

「……」

子供の頃からひねくれていた自覚はある。しかも、今以て自分の思考や言動が同世代とズレている。印象が深くなるのは否めない。

「あの、何か勝手に盛り上がつてるところ申し訳ないんだけど、何が起きてんの？」

書記長が口を挟む。まあ疑問に思つても仕方ないだろう。

「ホントにいつぱい名前があるねえ、二人とも」

暁人はウザい。名前など自分で付けたものではないのだから仕方がない。無視だ。

「それは秘密。…な、輝悠」

「…。ヒロ、それはともかく…本題に移つてくれると助かるんだけど」

「ああ、悪い。…えーと、先日事件のことでちよつと話があるんだ。そっちの椅子に座つて」

ヒロの言葉に従い、豪華な刺繍の施されたアンティークのテーブルへ向かう。

嫌な予感がする。

風向きがおかしいように見えた。生徒会室の窓からは丁度中庭が見える。その枯葉がふわりふわりと浮き上がっている。

落ちる寸前の美しい輝きを放つ太陽が窓から差し込み、僑苡と暁人の髪を青く染める。それと同時に、頭の奥で何かの音がしている。そう。

今生徒会室に居ることは大した問題ではない。

どこかで何かが起きている。それはきっと、自分に関係することだ。

『ざけんなよっ』

『蒼兄!!』

『離せよ、くそ!! どうして俺は“璃”じゃないんだ!! …“璃”だったら、お前を助けられるのに…、悠璃………』

『蒼兄、いいから…。大丈夫だ。悠璃を助ける方法は、俺も純平も考える』

『昂璃……』

『大丈夫だ。…きつと見つかる。だから、今は家に帰ろう』

『純平……』

『昂璃、蒼夜さんを頼むな。俺は今から仕事入ってるから』

『ああ。完璧にこなしてこい』

『俺がNG出すわけないだろ?』

『…純平、気を付けろよ』

『蒼夜さん?』

『頼むから、俺の知らないところで居なくなるな。…俺はもう、あんなのは二度と嫌だ』

頭の中で響いた会話は、
一体どこでされているのだろう

。

過去の欠片（後書き）

さて、何だかようやく本題に向かえそうな気がします。

タイトルですが、この辺の話にはまったく絡まないので変ですねー。

ストーリーも疑問だらけですねー。

というわけで次回はそれらの解決が入れられるように調整するつもりです。

従兄弟との初対面、その印象（前書き）

改稿するとか言っときながら、したのはまだ一話だけ…。
実際には十話くらい終わってますので、そのうちに出しますね。
目標は夏休み一杯まで。（え

従兄弟との初対面、その印象

「輝悠？」

「緋月？」

「綺夕？」

「紫藤？」

遠くで自分僑苡たちの声が聞こえる。だが私はそれに応えられない。目が釘付けになっていた。

「お前は？」

訊ねてくる声は低くもなく高くもない。無機質な感じで、酷く乾いている。

顔は僑苡や暁人に通じるものがあるが、どちらかと言うと私に一番近い。

第一印象は僑苡に似ていると思ったのに、こうしてまじまじと見てみるとむしろ私に近いと思うことはつまり、再会してからこつち、比較の対象があり過ぎたせいだろう。

髪も目も私と同じ色。薄く形のいい唇はハングリーさとは無縁にしか映らないのだが、彼の目とつり上がり気味の眉がそれを見事に裏切っている。

「……一般的には緋月と呼ばれるわ」

「俺は浅葱」

「夏野ね。…ハイジャンの期待の星、だったかしら」

『……嫌な呼び方だな』

『世間がそう言っているだけじゃない。とりあえず知ってることを言ってみただけ』

『…。お前、俺とそっくりだな』

『私にもそう映っているわ。……ドッペルゲンガー？』

『ドッペルゲンガーは性別が違ってモイイのか？』

夏野はどうやら天然だ。素で微妙なポイントを突いてくる。

『……さあ？』

『じゃあ何なんだ？』

『イトコ従兄弟じゃないかしら』

別に駄洒落でもオヤジギャグでもない。偶々だ。断じて偶々だ。念を押すと怪しいと言わない。

『…成る程。でも、お前は“璃”か？』

『…多分』

夏野の目が見開かれ、収縮する。すぐに金の瞳が顕れる。

美しく散った色が素晴らしい濃淡を描く紫だと一発で分かるほど大きな瞳は勝ち気でどこか超然としていた。王者の風格というものがあるとしたら、多分このことなのだと思った。

『目は？』

証拠を求められても困る。

『さあ。自分で意識して変えたことはないから』

実際自在に変えることが出来ることも知らなかった。

『“璃”として育たなければそんなものか』

『別に特に必要性は感じないもの』

それでどれ程の能力が発現しようと現在の私には関係ない。

事業に関わるでもなく、むしろ何もしようとしない私に対して柊さんもそうだったことは求めているように、精々アメリカに留学していた頃に株をかじった程度だ。

実際“璃”がそうだったことに関して強いのだとしても、私が出すべきことではないと思っている。それが多分、顔も知らない

母への唯一の恩返しになる。

私は自分の能力に踊らされたくはなかった。

だから、幅跳びが好きなのもかもしれない。ある程度の才能はあるとしても、そこからは地道な努力しかない。

それが自分にも心地良い。結果がすぐには出なくても、その過程は無駄にならない。それはマネーゲームをする人間には分からないだろう快感をくれる。その間私は束の間の優越感に浸れるのだ。

『必要ない、か』

夏野がくすりと笑う。それはどこか達観した笑みで、ただそれだけで彼の歩んできた人生が見えるようだった。

『分かっているわよ。……どれだけ傲慢な科白かなんて。でも、そんな能力が私を幸せにするとも思わないし、私の周りの人も幸せになれない。……都合良く利用されるだけの人生がもたらすのは奴隷の幸福でしかないじゃない』

『……………』

夏野はぼかんとしている。憤然とマシンガントークをかますキラには見えないからだろうか。

いずれにしても、これを機会に女の怖さを知ればいい。と、大分攻撃的な気分になっている今は思う。

基本的に男は苦手だ。それは精神的なものよりも肉体的なものの方が大きく、近寄られると眉毛が無意識に震える。警戒心剥き出しだ。

多分、未だにブルジョワ生活に慣れないのはこのことも一端を担っているのだろう。

『…女は遅しいな』

静寂に包まれ閉じた空間に溶け込むように、夏野の瞳が私と同じ色に戻る。その目にはどこか、羨望が混ざっているように見えた。

『夏野……………？』

私は狼狽えた。何に對しての羨望かが、伝わってくる。

それは多分、愛情で。

夏野の存在は、ただそれだけのためにあって。

私が僞苙に持つものよりも、ずっと強くて。

だからこそ、恐ろしくて。

がんじがらめになったまま、現実から逃げて。

だから彼には、未来が見えない。

『……夏野……』

呆然とただ、名前を呼ぶことしかできない。

夏野はどこまでも愚かで、多分誰よりも私に似ている。

だから今の夏野に何を言っても無駄だと知っている。

それは何の解決にもならない。

でも。身体は意に反して言葉をつむぐ。

身体の中で10年間溜めた澱が裡からせりあがり、どす黒く渦巻いて私を支配する。それは影なのだと、もはや抗うこともなく実感する。

『……………今のままなら、それは昴璃に対して失礼だわ…』

その言葉が発せられるより前に何を言ったのかはよく分からない。それでも、それは私の正直な気持ちだということは確かだった。

『失礼か……………』

夏野の長い睫毛が白い頬に影を作る。

『貴方は昴璃のことを想っているわけじゃない。…ただ単に傷つくのが怖いだけ……………』

『…っ』

『自分だけがいつまでも好きでいるのが怖い。心変わりされたら生きていけない。いつまでも頼りにされたい。見捨てられたくない。世間の目が怖い。自分の立場が怖い。女には敵わない。子供が産めない。子孫を残せない。家にも戻れない。逃げるしかない……………』

『うるさいっ！』

夏野が絶叫する。

どす黒い衝動は私を突き動かしたが、それでも後悔はない。初対

面であろうと何だろうと、夏野に言えるのは自分だけ。

それは不思議なほど納得できた。言うのは自分の役目なのだと。

『昂璃はそれでも貴方を愛しているでしょうね。何もなかったって、それでも慕い続けるんでしょうね。…忠犬のように』

『……………』

怒鳴った後は後悔したように黙り込む夏野に、それでも私は畳み掛ける。ひるんではいられない。

『……双子なのね。野良猫と忠犬じゃ、夏と冬だもの』

そんな気がした。会ったことのないもう一人の従兄弟は、夏野と似たところなんてほとんどない、むしろ正反対の人間なのだろうと。そしてこういう予感の外れない。

夏野は私の呟きを、まるで堪えるかのように目を閉じて聞いている。た。

従兄弟との初対面、その印象（後書き）

マシンガントーク全開、フルスロットル。

いつもこの位のテンションなら、もっと早く進むのに……。
自業自得。

対峙っていうより鏡と睨めっこ？（前書き）

なんだこのタイトル…。

と思った方すみません。

というか一年ぶりでごめんなさい。

緋月のマシンガン継続中です。

対峙っていうより鏡と睨めっこ？

いつの間にか、景色はきらきらと輝いていた。

（雪みたい…）

触れても何の触感もない銀の粉は全ていびつで不揃いだった。

『ねえ夏野。……ハイジャンを逃げ道にするのは失礼よ』

自分で言いながら、私の胸にも突き刺さる。

『……』

『ライバルにも、昂璃にもね……』

『……知っている』

夏野の声は私と同じ、硬質で高くもなく低くもない無機質な声だ。
その声がいつそう冷えていく。

『本当に分かってるの？』

『ああ』

『嘘ばかり。心の中では逃げることしか考えてない癖に』

私には分かる。夏野は私と同じだから。

『そうだとすると、結果が出ている限り、誰にも止められない』

『結果？そうそう塗り替えられる記録じゃないでしょう。期待という名のプレッシャーで潰されていく位なら、自分からやめてしまえばいい』

『お前はそれが怖くないのか？』

『何で？私はともかく世界記録持つてるのは夏野でしょうが。高みを極めてしまえば、自然と興味も薄れることもあるでしょう……ってことにしてしまえばいいじゃない。自分で折り合いを付けて、それからリスタートを切れば良い。まだ16なんだから』

『それでも……』

『選ぶのは夏野でしょう？……でも、逃げることもどちらも取ること、結局は中途半端にしかないことは、覚えておくのね』

夏野の目を、真っ直ぐに見つめる。私たちは同じだからこそ、相手から逃げてはいけないのだ。

銀の粉が、互いの髪を白く染めていく。静かな時間の流れる場所で、私と夏野は睨み合う。

『分かつてる』

しばらくして夏野は小さく呟いた。

（同じでも）

（恋をしていない分、夏野の方が弱い）

将来の见えない恋なら、尚更に。

『私は、昂璃と同じように僞苡を探していたわ…。心が求めていた。だから、引導を渡すのなら、せめて貴方がやるのね。貫く気があるのなら、一生貫きなさい。…この恋がそれだけの重さを持つてくらないは、理解しているでしょう。下手に逃げれば、ややこしくなるだけよ』

だから、何度でも私は、同じことを言うしかないのだ。

.

対峙っていうより鏡と睨めっこ？（後書き）

はい、どうも。

短かったですね。

前話の後、すぐに書き始めていながらこの状況…。緋月が暴走しまくりまして、結局会話が成立しなくなったので保留したのですが…うん、あれですね、元々自己満で書いてたものですけど、もう皆から忘れ去られてるんだろうな、と。

これからも超絶亀更新でも頑張ります。

この作品に再び神が舞い降りれば週一ペースになるかも知れません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0159d/>

桜の幻想

2011年2月3日19時14分発行